



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

9

スタンダール

パルムの僧院 大岡昇平訳

中央公論社

世界の文学 9

©1965

スタンダール

訳者 大岡昇平

昭和40年5月10日初版発行

昭和43年2月22日6版発行

価 430 円

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社

扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社

口絵印刷 東京プロセス株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地

電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

パルムの僧院

付録

バルザックへの手紙

マルジナリア

フアルネーゼ家隆盛の起源

若き日のアレックスandro・フアルネーゼ

『パルムの僧院』参考年譜

解説

年譜

3

440

454

460

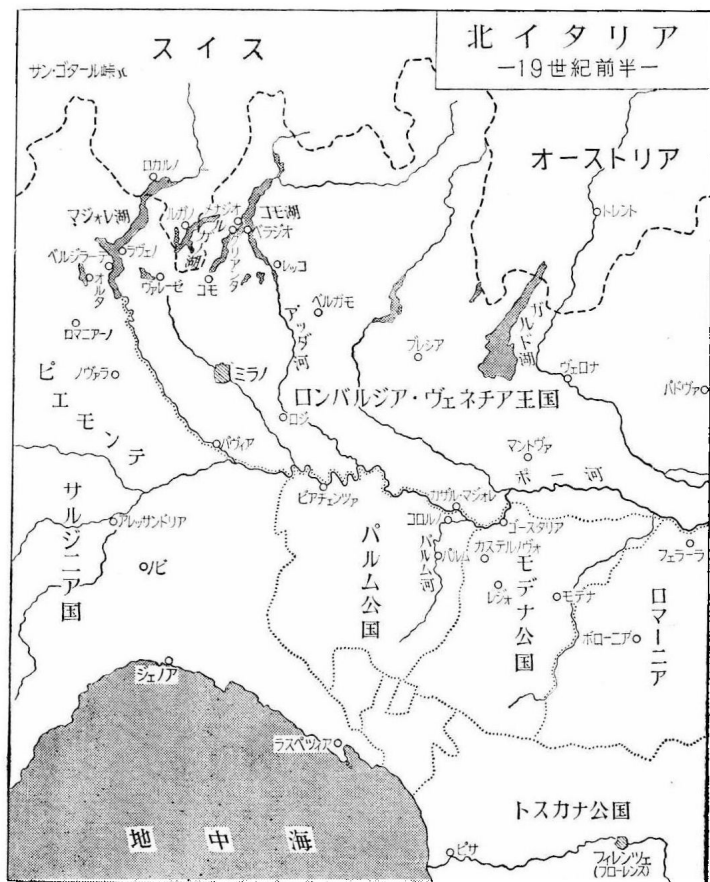
463

472

478

500

パ
ル
ム
の
僧
院



緒言

一八三〇年の冬、パリから三百里離れたところで、この小説は書かれた。したがって一八三九年の事態を諷するものはない。

その一八三〇年よりだいたい前のことである。わが軍がヨーロッパ狭しと馳せまわっていたころ、偶然ある司教会員の家の宿泊券が当たった。

イタリアの美しい町パドヴァであった。滞在は長びきわれわれは友となった。

一八三〇年の末またパドヴァを通ったので、私は早速その司教会員の家へ駆けつけた。彼はもうこの世の人ではない、それは知っていたが、当時あれほど楽しく、その後幾度となく思い出した宵を過ごしたサロンを、私はもう一度見たかった。家には司教会員の甥とその奥さんがいて、私を旧友のように迎えてくれた。幾人かの客も来て、われわれは夜遅くまで話し込んだ。甥はカフェ・ベドロッキから美味しい *sauvignon* を取り寄せた。われわれがそんなに夜更かしをしたのは、客の一人が口に

したサンセヴェリーナ公爵夫人の物語のためであった。甥は私のために物語を初めから繰り返してくれた。

「私の行く国にこんな夜会はめったにあるまいと思ひます」と私は一座の人たちにいった。「長い宵を過ごすために、その話を小説に書いてみましょう」

「そんなら伯父の年代記を差し上げます」と甥がいった。「その中のパルムの項は、公爵夫人があつた町で全盛を誇っていたころの、宮廷の陰謀に触れています。しかしお断わりしておきますが、この物語はあまり道徳的ではありません。近ごろあなたはフランスで福音書純潔を自慢にしていられるそうですから、人殺しといわれるかもしれませんよ」

私はこの小説を一八三〇年に書いたまま刊行する。二つの不便があるかもしれない。

第一の不便は読者に関係する。つまり作中の人物はみなイタリア人だから読者に興味が薄いだろうということである。この国の人の心とフランス人の心はかなり隔たりにある。イタリア人は真面目で、お人好しで、ひねくれていないから、思ったことを何でもしゃべる。彼らが虚栄心を持つとしても一時の発作にすぎない。それはすでに情熱であつて、名譽の問題 (*Puntiglio*) と呼ばれる。それに彼らにとって貧乏は滑稽ではない。

第二の不便は著者に関するものである。

私がいきって諸人物をその荒い性格のままに残したことを告白する。一方これは声を大にしていわねばならぬことだが、私は彼らの行為の多くに峻烈な道德的非難を浴びせるものだ。しかし彼らにフランス人の高德と優雅を与えたとなんになろうか。何よりも金を愛し、憎しみや愛からはほとんど罪を犯すことのないフランス人なぞ。とにかく南から北へ二百里行くごとに、景色が変わるように小説も変わるような気がする。司教会員の可愛らしい姪はサンセヴェリーナ公爵夫人を知り、深く愛していた。彼女は公爵夫人の行状はいかにも非難すべきものであるが、ありのまま書いてほしいと私にいった。

一八三九年一月二十三日

第一卷

むかしは景色のいいところへ行き
楽しく書いたものだった。

アリオスト『サティーレ』第四歌

第一章

一七九六年のミラノ

一七九六年五月十五日ボナパルト將軍は、ロジ橋^{*}を突破した若い軍隊を率いてミラノにはいった。彼らはかくも長い世紀を経た後、カエサルとアレクサンドロスがようやくその後継者を得たことを世界に知らしたばかりであった。

以来数カ月にわたってイタリヤが目撃した勇氣と天才の奇蹟は、眠っていた人民を呼びさました。フランス軍が着く一週間前まで、ミラノ人は彼らを王皇帝陛下^{*^{*}}の軍隊の至るところ、常に遁走^{とんそう}を続ける盜賊の一団だと信じ込んでいた。少なくともそれが汚ない紙に印刷した掌太の小新聞の、週に三回繰り返し説いたところであった。

中世には共和国市民たるロンバルジア人は、フランス人に劣らぬ勇氣を示し、代々のドイツ皇帝にその町を跡形なく破壊されてしまった。忠良なる臣民となつて以来、その大切な仕事はといえば、貴族か金持の娘の婚禮に当

たつて、薔薇色^{ばらいろ}の薄絹のハンカチにソネットを印刷するぐらゐなものだった。この一生の大事件から二、三年経つと、若い娘は扈從騎士^{こしやう}を持つようになる。どうかすると夫の家が指定した扈從騎士の名が、結婚契約書の中で名譽ある位置を占めていたりした。こういう柔弱な風習ほど、フランス軍のふいの到着が巻き起こした深い感動から遠いものはない。まもなく新しい情熱的な風習が起こつた。一七九六年五月十五日人民はみなこれまで尊敬していたものがすべて、この上もなく滑稽であり、どうかすると汚らしいということを悟つた。オーストリアの最後の連隊が退散するとともに、古い思想は地に墜ちた。命を賭けることが流行^{はや}り出した。幾世紀の気の抜けた感情のあとで、今や幸福になるためには眞の愛をもつて祖国を愛し、英雄的な行為を求めねばならないことを知つた。長く続いたカルル五世とフィリップ二世の嫉妬深い専制主義のおかげで、人民は深い夜に沈んでいた。銅像をひっくり返した。するとたちまち彼らは光を浴びるのを感じた。五十年來『百科全書』とヴォルテールがフランスで開花していた間に、僧侶は善良なミラノ人に、読むことを習い、または何かを学ぶのはまったく無益なわざであり、ただ司祭に規則正しくお布施^{おほし}を払い、自己の小さな罪を包まず告解さえていれば、天国で相当な位置が得られると叫び続けていた。かつてあれほど癡猛^{ばくもう}

かつ賢明だったこの人民を、まったくの腑抜けとするために、オーストリアは軍隊に壮丁を送らずにすむ特権を安く売りつけた。

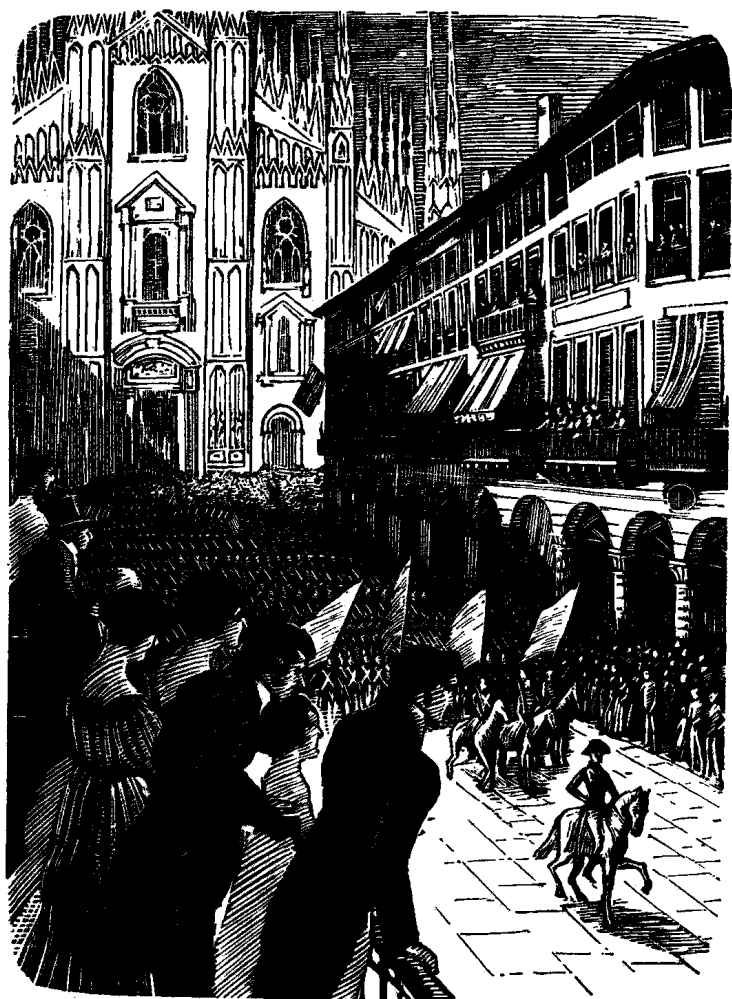
一七九六年のミラノ軍は、赤いお仕着せを着た二十四人の能無しから成り、堂々たるハンガリア擲弾兵の四個連隊と協同して町の警備に当たっていた。風紀はこの上なく乱れていたが、情熱はきわめてまれであった。この世を失うぞと脅かされながら、司祭にすべてを語るのを拒んだほかは、善良なミラノ人は依然として苛酷な君主制的な小さな束縛に屈していた。例えばミラノに住み従兄弟の皇帝の名代として統治していた大公は、小麦の売買をやるうという欲張った考えを起こした。その結果百姓は殿下の倉庫がいっぱいになるまで、作物を売ることを禁ぜられた。

一七九六年五月フランス軍の入城の三日後、軍に随行したグロ^{*}というちよつと気が変な密画家（その後名を挙げた）が、当時流行のカフェ・セルヴィで大公の大事業の話を聞いた。彼は黄色い汚ない紙に刷ったメニューを取り、その裏に肥った大公を描いた。一人のフランス兵がその腹に銃剣の一突きを与える、すると血のかわりに小麦がざくざく流れ出るという図柄であった。冗談とか諷刺画とかいうものは、この疑い深い専制主義の国では知られていなかった。グロがカフェ・セルヴィのテーブル

ルの上におきざりにした画は、天から降った奇蹟のようなものだった。画は夜のうちに刷られ翌日二万枚売れた。同じ日六百万フランの徴用金が告示された。六つの会戦に勝ち二十の州を従えながら、靴、ズボン、上着、帽子にこと欠いていたフランス軍の必要を充たすためである。

こんなに貧乏なフランス兵とともに、ロンバルディアに爆発した幸福と快楽は大きかったから、六百万の徴用金をひどいと思ったのは二、三の貴族と僧侶だけであった。徴用金はやがて幾度も追加された。フランス兵は一日じゆう笑い歌った。彼らはみな二十五歳以下であり、二十七歳の総司令官が軍の最年長者と思われていた。この陽気、この若さ、この気随さは、坊主どもの猛り立った予言とおかしな対照を示していた。彼らは六ヵ月以来その説教壇の高みから、フランス兵は人でなしであり、死刑で脅かされているから、すべてを焼き払い、人民の首をみな切らなければならないのだと説いていたのである。そのためフランス軍は各連隊の前に、断頭台を立てて行進するということであつた。

田舎では藁葺の家の戸口でフランス兵が、その家の子供をあやしている姿が見られた。ほとんど毎晩太鼓をヴァイオリンのかわりにした即席の踊りが催された。四人舞踊はむずかしすぎたし、第一、兵隊自身よく知らな



ったから、百姓女に教えてやるわけには行かなかった。そこで彼女たちのほうが、若いフランス兵にモンフェリン、ソートーズその他イタリアの踊りを教えることになった。

将校はなるべく金持の家へ泊まった。彼らはとにかく休養する必要があったのである。例えばロベールという中尉はデル・ドンゴ侯爵夫人の館の宿泊券を得た。彼はすばしっこい若い徴集将校であったが、この邸館へはいったとき、ピアチエンツァで受け取った六フラン貨幣一枚がその全財産であつた。ロジ橋を渡った後、彼は砲弾で死んでいた美しいオーストリアの将校から、まっさらの南京木綿の立派なズボンを取ったが、こんなにうまく被服にありついたのは、とんとなかったことである。彼の将校の肩章はラシャだった。しかし服はぼろが落ちないように、袖のところで裏地と縫いつけてあつた。さらにみじめだったのは、靴の底もやはりロジ橋の向こうの戦場で拾った帽子の切れ端でできていたことである。この即製の靴底は太い糸で上側へ縫つてあつたので、大膳職がロベール中尉の部屋へ来て、侯爵夫人といつしよに正餐をするように招いたとき、中尉はとうとうに暮れてしまった。彼は従卒といつしよに正餐まで二時間かかって上着をつくり、例の靴の紐に墨を塗った。ついに恐るべき時が来た。「あの時ぐらい困ったことはなかったよ」

と中尉はいった。「婦人のほうでも怖かったかもしれないが、こつちだつてびくびくものだったのさ。靴を眺めてどうしたら格好よく歩けるだろうかと考え込んでしまった。デル・ドンゴ侯爵夫人はそのところが美しさの盛りだった。君も知つてるとおり天使のような優しさをたたえた美しい眼、あの卵形の魅力ある顔をかこむ濃い美しい金髪、当時私は部屋にレオナルド・ダ・ヴィンチのエロディアーデをかけていたが、それが彼女そっくりだった。この世のものとは思われない美しさを感じ見とれて、自分の身なりも忘れてしまったくらいだ。なにしろ二年間ジェノアの山の中では、醜いみじめなものばかり見ていたんだからね。私は思ひきつて彼女に二言三言自分の讃嘆を話してみた。

「といつて私もいつまでもお世辞ばかり並べているほど馬鹿じゃない。文句をひねりながら、私は大理石造りの食堂に十二人の侍僕が並んでいるのを見たんだが、その衣装がなんと立派に見えたことか。奴らはちゃんとした靴をはいているばかりか、銀の止め金までついているじゃないか。奴らが私の服や、たぶん靴も、間拔けな顔で、じつと見ているのを横眼に感じると胸をえぐられるような気がしたね。一言で奴らをふるえ上がらしてやるのはわけはないが、しかし婦人方をこわがらせずに、うまく思い知らしてやるにはどうしたらいいだろう。その後

侯爵夫人から何度も聞いたところによると、彼女は少しでも心丈夫なようにと、当時修道院にいた夫の妹、ジーナ・デル・ドンゴ嬢を呼びにやったくらいだからね。あとで美しいピエトラネーラ伯爵夫人になられた方だ。全盛にあって陽気さと愛嬌で彼女にまさる者はなかったように、彼女ほど勇氣と平靜をもって悲境に堪えた人もいない。

「ジーナはそのとき十三だったが、君も知っているように、生き生きとして率直で十八くらいに見えた。彼女は私の身なりを見て笑いを我慢するためか、食事に手もつけない始末だ。しかし侯爵夫人はうるさいくらい親切にしてくれた。彼女は私の眼に浮かぶ焦燥しょうそうを見てとったのだ。要するに私は馬鹿げた顔をしていた。軽蔑を噛みしめていた。これはフランス人にはできない芸当だということになっていくんだが——ふいに天来の考えがひらめいた。私はご婦人方に私のみじめさ、低能な老いぼれの將軍のために、ジェノアの山中に二年間こもっていた間、堪えねばならなかったことを話しはじめた。あの国で通用しない不換紙幣ばかりもらっていたこと、一日三オンスのパンしか支給されなかったことなどをね。話しはじめると侯爵夫人はすぐ涙を浮かべ、ジーナは真面目になった。

『まあ、中尉さん、パン三オンスですって』とジーナは

いった。

『そうです、お嬢さん。その上配給は一週に三度も欠けるんです。けれども私たちの泊まっていた家の百姓はもつとひどかったので、私たちのパンを分けてやったくらいです』

「食卓を離れると私は侯爵夫人に腕をかし、サロンの入口まで導いた。それから大急ぎで引き返して、給仕した召使にたった一枚の六フラン貨幣をやってしまった。その一つの使い途ついでについていろいろ考えてあったんだがね。「一週間の後」とロベールは続けた。「フランス軍がだれも断頭台にかけやしないのがわかると、デル・ドンゴ侯爵がコモ湖畔のグリフンタの城から帰って来た。フランス軍が近づくと彼は勇敢にも、自分の美しい妻と妹を戦争の中に置きざりにして逃げ出していたんだがね。この侯爵がわれわれに抱いていた憎悪はまさにその恐怖と等しかった。つまりはかり知れないほどだったということさ。私にお愛想をいうときの、彼の蒼い大きな信心家らしい顔ほどおかしなものではなかった。彼がミラノへ帰った翌日、六百万フランの徴用金のおかげで、私は三オリーヌの布地と二百フランもらった。私は身なりを整え、ご婦人方の騎士になった。舞踏会がまた開かれるようになったからだ」

ロベール中尉の運命はだいたい、あらゆるフランス人

のそれだった。ミラノ人はこれら勇敢な兵士のみじめさをわらわないで、憐れみ愛した。

このふいの幸福と陶醉の時期は二年しか続かなかった。狂乱はあまりにもはげしく、広く蔓延したから、せいぜい次の深い歴史的考察を行なうにとどめようか。要するにこの人民は二百年来退屈しきっていたのだ。

かつて有名なミラノ公ヴィスコンティ・スフォルツアの宮廷には、南国の自然な逸楽があった。一五三五年スペイン人がミラノを征服し、しかも疑い深く、傲慢で、常に反抗を恐れる無言の主君として支配しだして以来、陽気さは消え去った。人民はその主君の風俗を模し、現在を楽しむよりは、ささいな侮辱を短剣の一撃で報いることばかり考えていた。

フランス軍がミラノに入城した一七九六年五月十五日から、カッサーノの戦いの結果追い払われた一七九九年四月までの気違いじみた歓喜、陽気さ、逸楽、およびすべて物悲しい、あるいは分別臭い感情の忘却はとうもろもないものだったから、年老いた大商人、高利貸、公証人すら、この間は気むずかしい顔をするのと金儲けを忘れてしまったほどであった。

わずかに少数の大貴族が、みな陽気な様子と心のおもむくに任せた振舞いに、気を悪くしたかのように、田舎の館に引きこもっていた。もっともこうした富裕な大

貴族が、フランス軍の要求する徴用金の割当で、不愉快な特別待遇を受けたのも事実だが。

デル・ドンゴ侯爵もこんな陽気さを見て不愉快になり、真つ先にコモ湖のかたがリアンタの大きな城館に逃げ出した一人である。婦人たちはロベール中尉をそこへ連れて行つた。城館はおそらく世界に類のない位置にある。このすばらしい湖から百五十尺聳えた台地に立って、湖の大半を見晴らし、昔は要塞であった。デル・ドンゴ家がこれを十五世紀に建造したことは、いたるところ紋章をちりばめた大理石を見てわかる。跳橋や、もう水はなかったが、深い堀もあった。この高さ八十尺厚さ六尺の城壁があれば、不意打ちを受けてもまず大丈夫だった。疑い深い侯爵がこの城を大事にするのはこのためだった。二十五人か三十人の召使にかしずかれ、彼はミラノにいるほど恐怖を感じなかった。彼は召使たちを忠実だと信じていたが、明らかにこれはどなりつけるときのはか、彼らに言葉をかけることがなかったためである。

この恐怖は全然根柢のないものではなかった。彼はグリアンタから三里離れたスイス国境に、オーストリアが戦場の俘虜を脱出させるために配置した一人の間諜と、ひんばんに文通していたからである。フランス軍の将軍が知つたら、とても見逃してくれそうもなかった。

侯爵は若い妻をミラノに残して来た。彼女はそこで家